『比較民俗研究』11. 1995／3

竹田　旦　著
『祖先崇拝の比較民俗学
―日韓両国における祖先祭祀と社会―』

大山　孝正※

著者は1970年代より，韓国において家族慣行や死者儀礼・祖先祭祀などについての現地調査を重ねてきており，これまでにも，その研究成果は『木の雁―韓国の人と家―』(サイエンス社，1983年)，『祖霊祭祀と死霊結婚―日韓比較民俗学の試み―』(人文書院，1990年)として公刊されている。本書は，主として1990年代以降に雑誌・編著書などに発表された比較的新しい論考を中心として，一冊にまとめられたものである。

まず，本書を構成する各論考を以下に紹介しておきたい。なお，ここでは初出誌名などは省略しておく。

Ⅰ　祖先崇拝と祖先祭祀
　一　死者の祭り
　二　祖先の祭り
　三　祖先祭祀の諸相
　四　家の神々と祭り
Ⅱ　祖霊と穀霊の祭り
　一　稲の霊と米の霊
　二　韓国の祖先壺
　三　韓国の初穂儀礼
Ⅲ　祖先祭祀の社会的基盤
　一　西南日本における家族慣行
　二　沖縄社会・文化の構造的基盤
　三　東アジアにおける済州民俗
　四　韓国の死霊結婚と死霊観
　五　東アジアにおける位牌の祭り
　六　西南日本における「分牌祭祀」の変容
　七　韓国家族における「隠居」
　八　韓国家族における老人
　九　韓国家族における嫁と姑

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

まず，「Ⅰ　祖先崇拝と祖先祭祀」のうち，「一　死者の祭り」「二　祖先の祭り」「三　祖先祭祀の諸相」の3編は，最近の大学での講義録をもとに，本書の序論として新たに書き下ろしたものである。これらの論考では，穢らわしい，恐ろしい存在としての死者に対する儀礼と，そうしたマイナスの感情が消滅し，死の忌みの晴れた祖先に対して行われる儀礼とを分けつつ，祖先とはいかなる存在か，死者が祖先として祭祀される条件とは何かを論じた上で，イエと祖先との関わりや位牌祭祀をめぐる問題などについて，著者のこれまでの研究成果を簡潔にまとめている。また，前著の『祖霊祭祀と死霊結婚』ではあまり見られなかった視点として，祖先祭祀の行われる特別な日取りとしての年中行事や農耕儀礼への言及が注目される。そのような本書ならではの問題意識が窺える「四　家の神々の祭り」では，日本や韓国の民家の屋内・屋外の各所に祭られる神々に対する儀礼について，年中行事・農耕儀礼としての側面から論じられているが，これは本書においては，続く「Ⅱ　祖霊と穀霊の祭り」への導入として位置づけられる。

その「Ⅱ　祖霊と穀霊の祭り」に収められた3編の論考は，祖先祭祀の農耕儀礼としての性格をめぐって多くの示唆を含んでいる。まず，「一　稲の霊と米の霊」では，稲または米を用いた儀礼には，稲・稲穂・籾のように翌春の稲苗の再生に結びつくものを用いる場合と，米やその加工品を用いる場合があり，前者では「稲の霊が年を越えて継承され永続されることを願う」信仰が見られ，後者では食物として米に「人の生死をも司る霊力―米の霊が蔵されている」とする信仰が見られるとする。そして，この「稲の霊」と「米の霊」に対する信仰は全く別のものであるとし，これまでの民俗学の議論において，これらが「穀霊」の語で統一的に呼ばれてきたことを指摘した上で，両者を区別すべきことを主張して

いる。「二　韓国の祖先壺」では，韓国の民家において部屋の一隅に米などの穀物を入れた壺・甕などを祭り，主婦が秋の収穫後に壺の中の穀物を収穫後の新穀と交換する「祖先壺」の習俗について取り上げている。ここでは，「祖先壺」の事例を列挙し，その態様を統括すると「最も一般的なケースとしては，主婦が壺に入れて夫婦の寝室で祭る習俗と規定される」とした上で，これが石塚尊俊の永く研究してきた日本の「納戸神」と対比できるとして[1]，そこに見られる類似と差異についてまとめている。「三　韓国の初穂儀礼」は，韓国において儒教による祖先祭祀の日取りとして重要な秋夕（チュソク）の前後に，稲のまだ実らぬ初穂を少し刈り取って祖先に供える「第１次収穫儀礼」について[2]，韓国各地の事例を挙げ，日本の「初穂儀礼」との比較を試みている。

これらの論考は，韓国や日本の祖先祭祀の問題を直接論じたというよりは，祖先祭祀と深く関わると思われる年中行事や農耕儀礼について論じたものと言えよう。日本の民俗学の研究史的には，祖先祭祀を年中行事や農耕儀礼との関わりで論じた研究は柳田国男以来の膨大な蓄積があるが，著者はこれまで日本国内に限定されがちであった論議を，韓国の民俗事象を通して見ることで相対化し，その上で日本の民俗事象との類似や差異について明らかにしようと試みている。そうした著者の取り組みは高く評価できようが，「穀霊」「稲霊」「初穂儀礼」といった用語に見られるように，ここで著者が韓国の民俗事象について分析を試みる際の枠組み自体は，これまで日本国内のみを対象として構築されてきた民俗学の枠組みに，大部分は従っていることにも気付くのである。これについては，日本の民俗学者による韓国その他地域での調査・研究のあり方として，今後大いに議論すべき問題を含んでいるのではなかろうか。

「Ⅲ　祖先祭祀の社会的基盤」に含まれる９編の論考のうち，「一　西南日本における家族慣行」は1973年，「七　韓国家族における『隠居』」は1980年に，それぞれ発表されたものであるが，そのほかには，すべて1990年代に書かれたものである。９編の論考の内容は多岐に渡っているが，日本と韓国における民俗事象の比較研究を志向するに至る著者の足跡を知る上で，興味深いものが多い。

本格的な海外調査の開始以前より，著者は日本の隠居制を中心とした家族慣行の研究に取り組んできたが，末子相続や隠居慣行などの分布状況から，日本の家族慣行に見られる地域差の問題を整理した「一　西南日本における家族慣行」は，著者の長年の族制研究において一定の成果を示すものであろう。著者は1967年に初めて沖縄を訪問しているが，その後の沖縄調査は著者自身の研究において大きな転機となったようである。「二　沖縄社会・文化の構造的基盤」では，沖縄における位牌祭祀をめぐる禁忌などの問題から，沖縄社会における女性のあり方について論じ，そうした社会・文化の構造的問題について韓国社会との対比も行っている。1970年代より開始された韓国での調査では，著者の関心は家族慣行や位牌祭祀のみならず，未婚の死者をして結婚させる「死霊結婚」の問題にも及んでいる。「三　東アジアにおける済州民俗」では，済州島における「死霊結婚」や，祖先祭祀を直系・傍系の親族間で分ける「分割祭祀」などに見られる地域的特徴が，この島の本分家を対等視する家族慣行に基盤を持つものであるとして，韓国陸地部や沖縄などとの対比を試みている。「四　韓国の死霊結婚と死霊観」は，「死霊結婚」などの死者儀礼を支える韓国人の死霊観・他界観について，端的に論じたものである。「五　東アジアにおける位牌の祭り」では，日本・中国・韓国の祖先祭祀において用いられる位牌の問題を取り上げており，「六　西南日本における『分牌祭祀』の変容」では，葬礼・祭礼を兄弟間・本分家間で分担

する「分牌祭祀」の習俗の変容について，その前提となる家族慣行や社会構造の変化という観点から論じている。「七　韓国家族における『隠居』」「八　韓国家族における老人」「九　韓国家族における嫁と姑」の3編は，韓国における家族慣行の実態を知る上で興味深い内容となっているが，著者が長年取り組んできた「隠居」などの家族内における居住の問題や，家長権の相続・継承，祖先祭祀の分割の問題などに対する視点が，これらの論考にも生かされている。

以上，極めて大まかに本書中の各論考の内容を紹介してきたが，それらの随所に，著者が「比較研究」「比較民俗学」の意義について述べている箇所がある。その多くは，韓国の個々の民俗事象について，日本や沖縄の民俗事象との類似や相違に着目しつつ，将来的展望として述べられたものであるが，「Ⅲ－一　韓国家族における『隠居』」には，次のように述べた下りがある。

> 日本と韓国とはまさに一衣帯水の地にあり，地理的に隣接しているばかりか，歴史的にも古来深い関係を保ちつづけてきた。双方の間に有形無形さまざまな文化交流がおこなわれたことも，ここに改めて多言を要しない。その交流が民俗文化の領域にも及んでいたであろうことも容易に推察される。しかし，そうした文化の個々が，一方から他方へとどのような事情のもと，どのようなルートをたどって伝播し受容されたのか，その経緯を明らかにすることはきわめてむずかしい。ましてや地域社会の構造に根ざしたような民俗文化については，ただ類似していると指摘しただけでは，学問上問題提起にもなりえぬ場合が少なくない。民族はもちろん，歴史・言語が違うのみならず，生活の体験をまるっきり異にする二つの国土において，ある民俗事象を比較研究するためには，あらかじめ幾段かの手続きを踏まなければならぬことは言うまでもない（p.288）。

その具体的な「手続き」について，例えば，上記引用部分の直前では，済州島の家族慣行には島内でも地域差が見られ，一村落内はもとより同じ家族・家門内でも多様な慣行が見られることを例にあげ，日本との比較研究を試みる前に，地域的広がりや歴史的にどのくらいまで遡りうるものかなどを追求し，済州家族制度の体系全般における位置づけを確立し，次いで韓国陸地部の家族制度との関係を明確にする必要があると述べている。

ただ，こうした済州島のような一定の地域内における，ある調査された民俗事象の位置づけを「比較研究」の前提とすることについては，特に済州島という特異な場合において強調されているに過ぎないようにも思われる。むしろ，本書の各論考に貫かれる方法論としては，民俗事象や社会構造の地域差に基づく類型化こそ，著者の「比較研究」「比較民俗学」の前提として常に志向されてきたと見るべきであろう。例えば，「Ⅲ－二　沖縄社会・文化の構造的基盤」の中で，著者は「このような（東北日本型と西南日本型といった：評者注）巨視的な類型論は，たとえば日本社会・文化の地域性論議のような大地域間の比較にふさわしかった。当然，民俗文化の国際的な比較を試みる比較民俗学には有効な方法論といえよう。」（p.163）と，明確に述べてもいる。こうした著者の志向する「比較研究」「比較民俗学」のあり方については，各々の研究者によって異論もあろうが，とかく日本国内に限定されがちであった民俗学の議論に，一定の普遍性を持たせるための一つの試みとして評価されえるのではないか。

ところで，「Ⅲ－三　韓国家族における『隠居』」の中で，「『隠居』だけを家族制度の全般から切り離して追求してみても，決して豊かな実りをもたらさぬだろうことを痛感した」（p.289）と著者自身が述べているように，

「祖先祭祀」「隠居」「死霊結婚」といった特定のテーマを掲げて調査を積み重ねるだけでは，それによって得られた個々の事例に対する評価や議論が片手落ちになることは否めない。これまでの著者の研究の足跡において，「比較研究」「比較民俗学」への志向とともに，その地域の社会・文化全体を視野に入れた研究のあり方への模索があったことは重要であろう。そのことと関連してか，本書中の随所に，「社会的基盤」とか「基盤」「構造的基盤」といった文字を見出すことができるが，それらの指し示す意味内容は漠然としており，幾分残念ではある。

（A 5版362頁　吉川弘文館　1995）

註

(1) 石塚尊俊「納戸神をめぐる問題」（『日本民俗学』第2巻第2号，1954年），同「民間の神―とくに納戸神と竈神―」（日本民俗研究大系編集委員会編『日本民俗研究大系』第2巻所収，国学院大学，1982年）。

(2) 依田千百子「朝鮮の稲作儀礼―その類型を中心として―」（同『朝鮮民俗文化の研究』所収，瑠璃書房，1985年）では，韓国における収穫期の儀礼を，陰暦8月15日の「秋夕」当日またはその前後に行われる「第1次的儀礼」と，収穫後に行われる「第2次的儀礼」に大別し，さらに「第1次的儀礼」を①初穂，②来訪者，③年占の3種の儀礼に分けている。竹田は，このうちの①初穂の儀礼のみを指して，「第1次収穫祭」「第1次収穫儀礼」「初穂儀礼」といった呼称を用いている。

崔　仁鶴　著
『韓日昔話の比較研究』

川森　博司※

崔仁鶴氏は，韓国と日本の昔話の比較研究の土俵を作るうえで，常に先駆的な業績を積み重ねてきた。特に，『韓国昔話の研究』（弘文堂　1976）は，日本の研究者が韓国の昔話資料を比較のために参照しようとするとき，もっぱら依拠するものとなってきた。また，『朝鮮昔話百選』（日本放送出版協会 1974 ），『朝鮮伝説集』（日本放送出版協会　1977），『韓国の昔話』（三弥井書店　1982）などは，日本語で韓国の資料が詳細に紹介されており，日本の研究者が，韓国の昔話・伝説の伝承状況をうかがうための貴重な拠り所となってきた。今回出版された『韓日昔話の比較研究』には，崔仁鶴氏の1972～1987年にかけての昔話をめぐる論考のうち，日本語で書かれたものがまとめられている。

本書は，「Ⅰ　昔話の理論」，「Ⅱ　研究史および研究動向」，「Ⅲ　地域研究」，「Ⅳ　比較研究」の4部から構成されている。ここでは，日本に拠点をおいて比較研究への視野を開こうとする立場にある評者の関心を呼んだ部分を取り上げ，本書から学ぶべき点について考察してみることにしたい。

Ⅱの中の「韓国における昔話の研究史」という論考は，日本で民俗学関係の研究にたずさわる者がぜひとも精読すべきものである。特に，その研究の胎動期（1927-39）における孫晋泰，崔南善，李能和，鄭寅燮，宋錫夏，任晳宰などの業績について，われわれはその意味を深く考える必要がある。この中で孫晋泰の業績について，筆者は次のように述べている。

「孫は1930年郷土研究社から『朝鮮民譚集』（日本語版：評者注）を出版し，本格的な昔

※国立歴史民俗博物館助手